「短歌県みやざき」を目指すために

宮崎大学教育学部　教授
中村　佳文

目次

1、はじめに
2、「短歌県」の原点―若山牧水とみやざき
3、「国文祭・芸文祭みやざき２０２０」の気運
4、学生とともに！図書館創発活動
5、むすび

1、はじめに

「宮崎は短歌県日本一を目指している。」どれだけの県民の方々が、これを意識しているだろう。宮崎牛や餃子売上などのグルメ関係からすると、未だ認知度は低いと言わざるを得ない。だが、現県知事（河野俊嗣）の公約にも掲げられた項目であり、真摯に「日常に文学表現のある豊かな県民の暮らし」という意味で身近な生活に関する大きな課題であるようにも思う。例えば、宮崎日日新聞社主催「俵万智短歌賞」は、県内在住・在勤者に応募資格があるが、二〇二二年度は過去最多の約一八〇〇首の応募があったと云う。「在住・在勤」に限定される意味も大きく、「宮崎の生活」に根ざした短歌が多く集まり「（土地柄か）明るい印象がある」（＊俵万智氏の弁）とされている。「短歌」は「日常生活」そのものと直結しており、「歌を詠もう」と思うことで個々人の「言語生活」が豊かになる。他の文芸よりも明らかに「生活」との密着度が高いと言えるであろう。昨今の社会状況として、「科学的エビデンス（根拠）」を重視し、「論理」らしきものの重視が様々な分野で説かれるのだが、もとより朧げな「人間の心」をなんとか「言語」で表現しようとする、「曖昧」への挑戦のような表現行為こそが、私たちの閉塞的な精神状態を解放に向かわせるはずだ。社会経済の混沌とした加速化・効率化・制度化の渦中において、我々が人間らしく生きるために「短歌」という「三十一文字の形式」が必要なのである。地方自治体の将来を見据え、このような考えを持った地域は未だ日本全国を俯瞰しても多くはない。宮崎でこそ叶えられる人間らしい豊かな生活、もちろん豊かな自然、豊かな食材にも囲まれつつ、我々はもう一つ「短歌」を県民の暮らしの根幹に据えてもよいのではないかと思うのである。

2、「短歌県」の原点―若山牧水とみやざき

もとより宮崎が「短歌県」を目指す原点は、近現代短歌史に欠くべからざる存在の若山牧水の生誕地であることに由来する。かつては牧水の評判といえば、故郷を捨てて文学三昧で恋や酒に溺れ、旅ばかりしているというイメージばかりが先行した存在であった。しかし宮崎県在住の歌人で牧水研究の第一人者・伊藤一彦（宮崎県立図書館名誉館長）によって、次第に牧水短歌の近現代短歌史上の功績が明らかにされて来た。また県内に事務局を置き伊藤が会長を務める「牧水研究会」の活動と研究誌である『牧水研究』の発行によって、次第に適切な評価が為されるようになったと言ってよい。

また、既に二〇二二年時点で第二十六回となった「若山牧水賞」は、その年に発行された歌集・歌書の中で評価の高いものに授与される。その多くが現在は日本の歌壇でも著名な歌人として評価され、宮崎県が主体的に讃える短歌賞として定着している。受賞者は、授賞式への来県とともに宮崎日日新聞への牧水に関する投稿、県内での講演、学校における生徒・児童との短歌交流など、牧水に対する意識を深めつつ県内短歌愛好者への貢献が義務となっている。この賞の存在こそが、牧水の名を現代に轟かせる大きな原動力になっている。必然的に県民は当代の定評ある歌人と授賞式や講演で接することになり、短歌愛好の熱を高める県民行事としての意義は大きい。

さらに、二〇二二年夏で第十二回を数える「牧水短歌甲子園」は、牧水の生まれ故郷である日向市主催の高校生のための短歌大会である。予選には全国から六十チームほどの参加があり、次第に全国区の大会として成長してきた。県内ではこの大会の存在により短歌活動が盛んになった高等学校も多く、若年層が短歌の魅力を知る契機にもなっている。「短歌甲子園」と名がつくからには、勝敗が伴う歌合形式である。しかし、本大会は必ず対戦相手の歌に敬意を払う

という慣習が、知らず知らずのうちに定着しているのも特徴的なこととといえるだろう。これもまた宮崎の県民性を象徴するような大会運営のあり方として、自ずと成長してきたと言ってよいのかもしれない。県内の高等学校から大会に参加した「選手」たちは、高等学校卒業後も「みなと」という会を結成しつながり合い、大会運営スタッフとして進行係や裏方の仕事に従事する。「短歌県」というからには、若い力がより多く短歌に向き合う必要があるゆえ、県内短歌の未来の担い手として貴重な存在である。

以上は代表的な「短歌県行事」であるが、これらを基軸として各地域・各年代層を対象にした公募短歌や大会の機会が、県内には数多く存在している。こうした根幹となる活動に加えて、今後は各行事をつなぐ連携が求められるだろう。その鍵を握るのは、学校現場での短歌への取り組みである。短歌は日常生活を素材とするだけに、生徒・児童の言語生活と結びつきやすい。この利点を活用し、生活そのものから学習指導要領に示された「学びに向かう力・人間性等」を外周に据えつつ、「短歌創作」という言語活動を設定し、日頃から短歌に勤しむ環境を醸成していく。その核心にあるのが「言語(知識・技能)」であり、「活用なくして知識・技能の伸長なし」と考えるならば、些末に知識を詰め込む授業よりも、宮崎県の学力伸長にも大きく貢献できるものと考えている。教育学部所属教員として、筆者に与えられた大きな使命は、「短歌創作学習単元の開発研究」であると決意を新たにするところである。

それではここで、若山牧水が宮崎県内の各所を題材にして詠んだ歌に触れておくことにしよう。牧水が本格的に短歌に取り組み出した大学時代、既に宮崎の地を離れ東京に在住する日々であった。大学入学までの約二十年間の人生を坪谷・延岡の地で過ごし育った経験は、牧水の中に何を遺していたのだろう。

日向の国都井の岬の青潮に
　入りゆく端(はな)に独り海聴く

船はてて上れる国は満天の
　星くづのなかに山匂ひ立つ

前掲二首は、第一歌集『海の聲』所載の歌。大学時代に宮崎に帰郷した際、医師であった父が無医村であった都井岬に赴いているのを訪ねた際に詠んだ歌で、「二十六首南日向を巡りて」の詞書を付す。一首目は、都井岬で海を眺めつつ自らが立つ岬の端(はな)が「青潮に入りゆく」と意志でも持っているかのように捉えたところに醍醐味がある歌である。また結句は第三歌集『別離』では「独り海見る」と推敲しているが、このまま「独り海聴く」の方がより眺望の無限な広がりを想像できる。二首目は「日向の油津にて」の詞書があり、船による旅で油津に寄港した際の歌。船が着岸すると視点が空に注がれ、その中に「山匂い立つ」と油津の地形を上手く捉えている。いずれも歌集名の「海の聲」との対話をしているような若き牧水を想像することができる。大自然の象徴のような海、幼少の頃は山間の坪谷で育ち七歳まで海を知らず憧れていた牧水が、目を凝らし耳を澄まして「海の聲」を聴いているのである。海の源は山中を流れる川、その先で海に注ぎ、再び水は蒸発して雲となり雨となって山に降り注ぐ。この循環の中にこそ大自然の摂理がある。号とした「牧水(本名・若山繁)」の「水」には、広大な大自然の中を駆け巡り様々な形に可変的で剛柔である「水」の存在への畏敬があるのではないかと思われる。これは山と海と、宮崎の地形の特徴が牧水の中にもたらせた自然観でもある。

ふるさとの美美津の川のみなかみに
　さびしく母の病みたまふらむ

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ
　秋もかすみのたなびきて居り

この二首はともに「ふるさとの」を初句とし、母や父の病を憂える心を抒べた歌。牧水にとって「ふるさと＝日向」は「母・父」そのものであると言える。一首目は第四歌集『路上』所収、「母の病みたまふらむ」ことを遠く東京の地から思いを馳せる様子が想像できる。当該歌の後にも「病む母・」を初句とする歌が並び、病気の母を思いやりながらも、短歌に表現して気を紛らわすしかない牧水のやるせない抒情が読み取れる。二首目は第六歌集『みなかみ』巻頭歌、危篤となった父を見舞うために帰郷した際に見上げた「尾鈴の山」の光景に託し、父の危篤への憂いや故郷を顧みず東京で文学に勤しむ後ろめたい心が読み取れる。以上のように牧水にとって、その自然観への多大なる影響とともに、文学に向き合うために離れて暮らさざるを得ない両親へのやるせない思いがその短歌の根幹に据えられている。もちろん既に伊藤一彦がくり返し述べているように、医師である父を継がなかった罪悪感を伴う、複雑な故郷・日向への思いを抱え込みながら、牧水が「命の砕片」そのものであるとした短歌には「みやざき」が顕然と据えられているのである。

3、「国文祭・芸文祭みやざき２０２０」の気運

「国文祭・芸文祭みやざき２０２０」は新型コロナ感染拡大の影響で一年遅れの二〇二一年に開催された。実施テーマは「山の幸海の幸　いざ神話の源流へ」とされて、フォーカスプログラムの中に「若山牧水（短歌）」が据えられた。当初の開催計画期間にあたる二〇二〇年より前から、筆者は県庁文化振興課や実行委員会の方々と「短歌県」については様々な議論を重ねてきた。目標としたいのは、多様な世代において身近に短歌のある生活を送ってもらうことを目指すことだ。そこで大会の前年（二〇一九年）、開催への機運を高めるために市内の書店で「短歌」に関連した出前講義をする計画が持ち上がった。題して「恋するあなたを応援―日本の恋歌とクリスマス」である。師走の風が吹く市内の書店二店舗にて、通りすがりの人でも気軽に聴くことができる講義を目指した。約六十分の講義であったが、二会場とも多くの聴衆が来場し盛況のうちに出前講義を終えることができた。その後、この講義内容を「一冊の単行本にまとめたらどうか」という進言があった。しかし、年が明け二月三月となると、周知のように人類が得体の知れない感染症に遭遇することになった。奇しくも所属大学学部において「教務・学生担当」の任にあり、二〇二〇年新年度の講義の運用をどうしたらよいか、という渦中に巻き込まれることになる。

当該年は四月以降、感染対策に向き合いながら瞬く間に過ぎ去った。予定されていた「国文祭・芸文祭みやざき二〇二〇」は東京五輪とともに一年延期が決定。プレイベントで気運を盛り上げようとしたが、水を差された状況になり単行本の構想も進まなくなった。ただただ日常で感染に留意することと、オンライン講義を中心に新たな取り組みに時間と労力を捧げる一年だった。年が明けて二〇二一年、足踏みばかりもしておられないと新年早々に出版社に出前講義単行本化の計画書を送付し検討をしてもらった。その結果、『日本の恋歌とクリスマス―短歌とJ-pop』（二〇二一年十二月二十四日刊　新典社選書一〇八）を刊行するに至った。ここではその概要を記しておくことにしよう。

「日本の恋歌」を通底する心は「待つこと」であり、恋の絶頂期を描くものよりも、期待と不安の入り混じる恋の初期や次第に離れゆく思いなど、苦悶と葛藤を題材にしている。しかし、近年の通信手段の個別化・高性能化によって人々が「待つこと」の環境に大きな変化が生じた。鷲田清一『「待つ」ということ』（二〇〇六年　角川学芸出版）では、「待たなくてよい社会になった。待つことができない社会になった。」と書き出されている。しかし恋に限らず、人の世は「待つこと」無くしては成り立たない。中学校二年生の国語定番教材・太宰治『走れメロス』は、単に「信実と友情の物語」というばかりではなく、お互いが「期待・希い・祈り」を込めて「待つー待たされる」状況に置かれた両名の心理を巧みな描写で物語化した小説だ。

若山牧水に次のような歌がある。

おもひやるかのうす青き峡のおくに
　われのうまれし朝のさびしさ（『路上』）

なぜ自らが生まれた「朝」を回想して「さびしさ」の感情を覚えるのだろう？人は「独りで生まれ独りで死ぬ」誠に孤独な存在である。時間経過のすべてが「待つこと」だとすれば、例外なく人間に与えられた運命は「死を待つ」ことだろう。ならばただ空虚に時間を待つだけでは、人として生きる意味が見出せない。孤独な運命であるゆえ人は「待ち時間」にこそ、多くの人々を好きになり交流し自らの孤独を埋めて行こうとするのだろう。それが人間の愛情・恋情・友情の正体ではないか。

牧水と同世代の歌人・原阿佐緒の一首。

待つという苦しきことを知らぬ身と
　なりたる今日のあはれなるかな（『涙痕』一九一三年）

なかなか公に会えない相手に対する恋の思いを詠んだ歌が多い歌集において、「待つという苦しきこと」が無くなったところ、心は安寧になるばかりか「あはれなるかな」と阿佐緒は詠う。恋とは「達成」ではなく、あくまであらゆる階梯における過程なのだと考えさせられる一首だ。

古典和歌に目を転じてみると平安時代初の勅撰和歌集『古今集』恋歌の巻頭歌には、次のような一首が見える。

ほととぎす鳴くや五月のあやめ草
　あやめも知らぬ恋もするかな
（巻十一・恋歌一・よみ人知らず）

この歌は「ほととぎす鳴くや五月のあやめ草」までが「あやめ（理性）」を導く序詞となっており、初夏の憂鬱で官能的な気分を表現している。恋に悩み身悶え理性さえも失うような恋心、やはり古来「恋」には苦悶することがつきものであることを詠っている。

著書ではこうした恋歌を、桑田佳祐を中心とする「J-pop 歌詞」との比較を試みている。前述した『古今集』恋歌に見える「ほととぎす」をそのまま題とする桑田佳祐の楽曲（二〇一七）があり、「恋に身悶える」思いを表現するバラードであることをここでは記しておこう。

そして同書のタイトルである「クリスマス」と「待つこと」の関係を示唆する歌として、次の小島ゆかりの一首を取り上げた。

待つ人はつねに来る人より多く
この街にまた聖夜ちかづく
（『ごく自然なる愛』二〇〇七年）

「永久の待ち人～渋谷ハチ公前」とする連作五首のうちの一首。スマホの存在で時代とともに事情は変化しているかもしれないが、「待ち合わせの光景」の普遍性を語り出している。こうした点を契機として、さらに「待つこと」とともに明治以降の日本のクリスマス受容を短歌と J-pop の曲で綴った一冊となっている。結びに向けて「永遠を待つ」と詠う伊藤一彦の歌も評し、宮崎県における心のあり方や「永遠の旅」という人生のあり方について、結びはやはり若山牧水の短歌によってまとめている。

4、学生とともに！図書館創発活動

「短歌県」を築くためには、若年層が短歌に主体的に取り組む環境が不可欠であろう。これまで短歌に関わる年代は、六十代以上の中高年層がほとんどと言ってもよかった。現に多くの短歌イベントでは、自ら足を運んで参加する年代層の多くが六十代以上である状況が否めない。それでも前述した「牧水短歌甲子園」の開催、「子ども新聞短歌欄」または諸所の公募短歌大会で「学生部門」などが設定され若年層の開拓が進んで来た。最近ではＮＨＫ夕刻のニュース番組内で「わけもん短歌」のコーナーが俵万智を選者として放映され、「県内の十代」に応募資格があるというのが大きく若年層の開拓に貢献している。少なくとも学校単位ではなく、小中高生が制約のない自由な環境で応募でき、短歌を基点として交流できる機会を県内に醸成してゆく必要性があると思われる。この環境整備については、あらためて「短歌創作学習単元の開発」という観点から、実践研究を進め、学校種間の交流などを含めた対面とオンラインを融合した展開を意図していることをここに付言しておこう。

さて、小中高生はもとより肝心なのは短歌創作機会の継続である。となれば大学生世代が親しみを持って短歌に勤しむ環境を整備することは「短歌県」にとって不可欠な条件である。

このような発想もあり、宮崎大学附属図書館では二〇二〇年のリニューアルオープンを機に、学生たちの主体的な「創発活動」を奨励・推進している。「創発」という用語の辞書上の定義は、「要素間の局所的な相互作用が全体に影響を与え、その全体が個々の要素に影響を与えることによって、新たな秩序が形成される現象。」（『デジタル大辞泉』ジャパンナレッジ）とされる。元来が「ＡＩにおける鍵となる概念」（情報・知識 imidas　ジャパンナレッジ）ともされている用語である。学生の個々が主体的な姿勢を持ち、多様な分野との対話に向き合い、自らの発想を創造的に深めて発信するという活動を、図書館空間に根ざしたものとするかを目指した活動である。筆者は、附属図書館副館長として、「創発活動」を活性化させ

るＷＧ長に任命されている。これまでの（大学）図書館は、利用者が蔵書・資料を利用し個々で他者と関わることなく静粛に学ぶ空間としてあった。しかし、今後の図書館は、利用者が他の利用者とも繋がり協働して蔵書・資料を活用し対話の機会を持ち、地域と交流する活動へも関わりながら新たな価値を創造する空間として位置づけたい。特に「対話」に対する考え方が重要であり、あらゆる可能性を排除せず同調圧力に屈することなく、創造的・発信的な活動を促進する場としてゆきたいわけである。

こうした「創発活動」を根付かせるためには、附属図書館のリニューアルコンセプトが重要になった。各階ごとにコンセプトを明確にし、理念のもとに目的に適った活動場所となるような配慮を施した改装を試みたわけである。一階は「コミュニケーションコモンズ」と命名し、「多様な人々がつながり情報に集う空間」とした。二階は「黙考の杜」、字の如く「黙って静粛に自らで熟考する空間」である。「杜」の字を使用したのは、「森」の文字が「自然に樹々のある場所」を指すのに対して、「杜」は「神社を囲む木立ち」という語源説があり、人造的に作り上げられてゆく樹木の集合体を指す。よって「杜」とすることで、利用者が個々の営為を希望あるものに創造し変換してゆく祈りも込めての命名とした。三階は「クリエイティブコモンズ」まさに「創造多元空間」となることを期待した場所だ。三つのフロアーを総合して「人と出逢い、自ら考え、創造できる図書館（創発・共創・協働）」の理念が根付いたものとして現在は稼働している。ここでは附属図書館のコンセプトに寄り道をしたが、ここに「短歌県みやざき活動」を根付かせるのが、大きな目標となった。

利用者としての学生は、「宮崎大学短歌会」の学生を中心にして、他大学の学生の参加も促した。本論で述べてきた「国文祭・芸文祭みやざき２０２０」を契機に、県庁文化振興課、またはアーツカウンシルみやざきなどとの連携事業を行うことを目標としている。以下、この目標を実現させた企画・行事を列挙することとする。

・二〇二〇年十一月七日（土）「全国高校生短歌オンライン甲子園」サテライト会場設置（応援トーク参加）

・二〇二一年七月十日（土）「みやざき大歌会」歌人・東直子さん・田中ましろさんトーク＆中高大学生参加の大歌会

図書館創発活動を活性化しようとした際に、「国文祭・芸文祭みやざき２０２０」が延期を伴いつつ開催されたのは、誠に本学附属図書館にとっては好機となった。その後は、「アーツカウンシルみやざき」による文化推進事業などに学生有志が企画を申請したことで二〇二一年度内には次の二つの事業が行われたことも特筆すべきことであった。

・二〇二二年二月～三月「ニシタチ歌集化プロジェクト」ニシタチの街灯電柱などにＱＲコードを仕込み、スマホで入力すると歌人・小島なおさんがニシタチで詠んだ短歌に出逢える企画。

・二〇二二年二月～三月「うたごはん」宮崎市内中心部の飲食店に短冊を置き、各店のお客さんが短歌を作り、宮大短歌会の学生たちが審査のための歌会を開催し、グランプリ入賞者を決める企画。

いずれも学生有志代表者に協力者が寄り添い発案した企画を、創発的に地域を舞台に展開した例である。以下、これまでの学生創発活動「短歌県づくり」のイメージ図を示しておく。

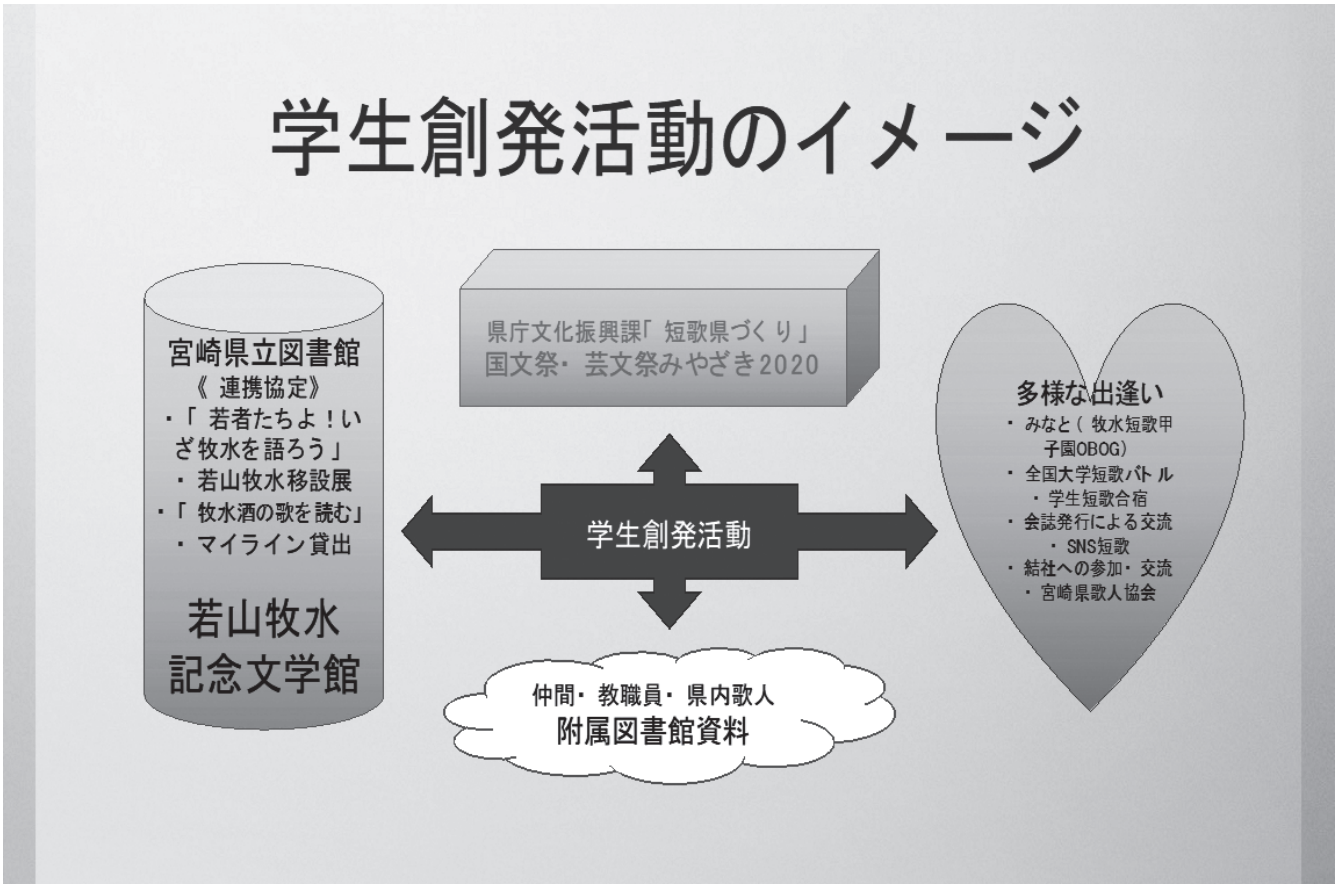

図１．学生創発活動のイメージ

5、むすび

以上、「短歌県みやざきを目指すために」と題して、複数の角度からその方向性と実践してきた活動についてを記してきた。活動をしつつ県庁文化振興課及びアーツカウンシルみやざきの担当者と対話をくり返す中で、「どのような環境が整えば短歌県か？」という命題を常に自問自答してきたところがある。年代を問わず、あくまで主体的に自らの生活実感を素材としてより多くの県民が、自らの言いたいことを三十一文字で表現していく。コロナ禍も相まって閉塞的な社会状況の中、自らの言いたいことを端的に忌憚なく表現できる環境を整えていくこと。生活上の辛さを三十一文字にして投げることで、明るい宮崎における多様な個々人の明日が叶えられていく。今後も学生の主体的な短歌活動を中心に、「短歌県みやざき」を地方ならではの「文学で県民の暮らしが支えられる」ような地域とすべく、今後も活動を推進してゆきたい。

最後に、項目２に記した「短歌創作学習単元の開発研究」については、本稿での内容に関連させ諸研究学会でのパネリスト発表や論文化、また県内高等学校国語教育研究会との連携を行なってきた。県内で学校種を超えた連携を生み出し、「国語学習」のみならず「短歌」による健全な青少年の育成に貢献すべく、活動を充実させていく所存である。その概念図を決意として最後に示し結びとしたい。

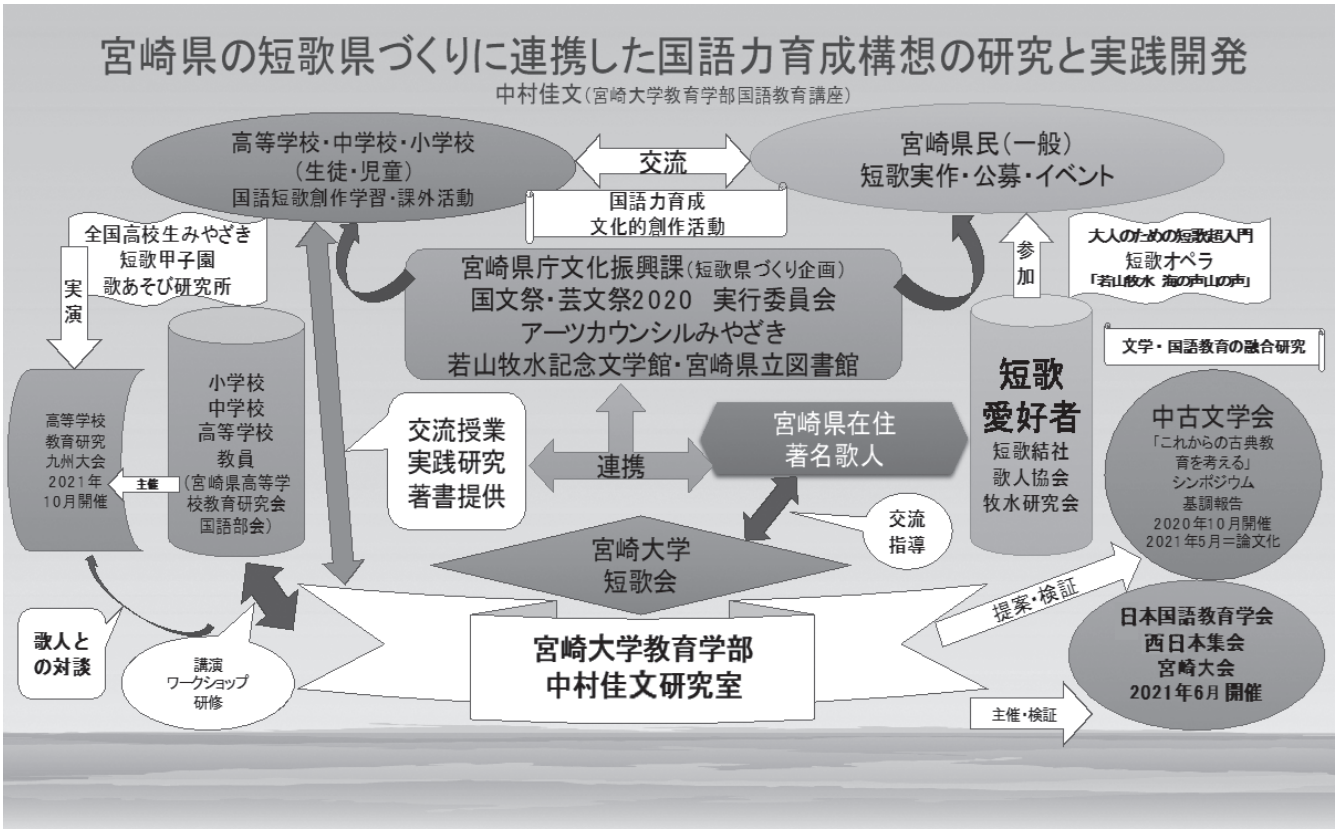

図２．短歌創作学習単元の開発研究の概念図